

## 「2017 年国立台湾大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学文学部三年 永田成望

このプログラムにて、私にとって一番有意義だったのは、自分自身とは何かを改めて考え直せたことです。参加者は京大だけでなく、他大の、それも自分とは明らかに全く異なる背景を持つかたと交流できたことは、私には大変貴重でありがたい機会でした。

私の所属したクラスでは、生徒が何か議題を提供して、それについて見解を述べた後、クラスで話し合うという授業がありました。自分に身近で、過去にたくさん考えたことのある議題の挙がる一方で、まったく知らなかったことが議題にのぼることもありました。

一番印象に残っているのは、台湾の歴史についての報告です。日本と台湾の両方にルーツを持ち、台湾で幼少期を過ごした彼女が語る台湾は、私のまったく知らないことばかりでした。台湾では繁体字を使っているらしい、おもしろそうだ、行ってみたい。その程度の気持ちで台湾を選び、参加した私にとって、それはとても大きな衝撃でした。私は何も知らないまま参加してしまった。このことも、このことも、何も知らない。新聞を広げて、一面記事に取り上げられた歴史的な出来事を知りませんでした。

こんなに知らないことがあるのか、そして、知らないままに生きてきたのか、という驚きは、その後何度も私を襲いました。知らないまま、のうのうと生きてきたことをたいへん恥ずかしく思いました。

去年行ったことのある南京との違いの多さにも驚き、日本に近いようで異国なのに戸惑いました。夜、ルームメイトと月を見上げて、日本で見るのと同じ顔をしているのにすごくほっとして、よかった、月は同じなんだ、と当たり前前にも思えることに感動しました。そして、チリで育った男の子に、チリと日本とで月の見え方が違う、三日月の向きとか、そういうのが違うんだ、と聞いて、当たり前だと思ったことがそうでなくなる瞬間にまた出くわしてしまいました。チリから日本に来て、同じように違う月を眺めて、私なら呆然としたらろうと想像してひどく切なかったです。

当たり前前のことが当たり前じゃない衝撃を、こんなにたくさん、思いがけず得られる機会を享受できて、たいへん幸せに思います。ありがとうございました。